襤褸を纏った少年は漆黒の瞳の中に幾千もの星を携えて彼方をみやるのが癖だ。
華奢な体、青白い肌、鳶色の髪をもちいかにも幼げで夢見がちな子供である。
彼の夢は亡き母の代わりに独力で育ててくれた父への恩返しをすること。
父を喜ばせるために少年は母を蘇らせようと夢を見ている。
父はそれを知ってか少年に妻のことよりもお前が一番だと告げる
少年は頬を染め、はにかみながらも学者になって母を生き返らせるのだといって
決心は固い様子だ。父のほうはその様子をみて無言でぽんぽんと柔らかな髪をたたいた。
その日から父の帰りが遅くなった。特に今夜は遅い。心配する少年は冷たいスープに手をつけない。少年は窓の外をふとみやる。父は帰ってこない。むなしくたなびく木陰から照らす月明かりはいつものように窓をさして少年へ降り注ぐ。雪が降ってきた。薄く灰色をした雪は木々につもり、冷気はさることながら僅かな光も途絶えてしまった。それでも少年は待ち続ける。彼は寒さに震えていたが、同時に暖かさも感じていた。父が帰ってくる可能性への期待。それだけで少年は恐ろしい夜に忍耐強く我慢することができるのだ。雪が降り終わる頃、父は帰ってきた。少年は気持ちよさそうに机にもたれてすやすやと眠っていた。父は疲れた様子も見せずに少年の傍らにそっと本と筆記用具を置く。それは初等学校への入学許可書と体についての本であった。父はクリスマスの任務を終え、冷たいスープを飲み干した。父の帰りはこれからも遅くなるだろう。